

三位一体論の予備的考察

小島 一郎

ユダヤ教もイスラム教もキリスト教も、いずれも同じ一神教であると言われているが、実は同じとは言えない。キリスト教は、一神教には違いないが、三位一体の神を信じることに於いて比類のない独特の宗教を成立させており、三位一体の神を理解できなければ、キリスト教は理解できない。

三位一体論は、「神認識の内容」として、すなわち、「神とはいかなる存在であるか」というような、神の本質並びに属性についての教会の信仰告白の内容として論じられるばかりでなく、信仰告白の根拠をなす神の啓示とのかかわりで、すなわち「神認識の方法」としての啓示論の問題としても論じられる。前者は三位一体の神の形式（順序）で告白されている「使徒信条」をはじめ、ギリシャ・ラテンの教父たちから宗教改革者たちを経て近代までの大部分の神学者たちに見られるもので、後者すなわち、啓示的三位一体論の代表はカール・バルトである。

また現代においては、伝統的なものを踏まえながらも、新しい三位一体論の試みも見られる。パウル・アルトハウ

スは、その三位一体論の理解を「愛」から出発させているとすれば、ユルゲン・モルトマンは十字架中心の三位一体論を展開している⁽²⁾という具合である。

さてそこで、聖書はこの「三位一体論」の問題をどう扱っているかをまず考察したいのであるが、すでにウィルヘルム・ニーゼルがカルヴァンの神学的姿勢について明らかにしているように、「聖書は教義学的労作にとつての基準であるが、そのための資料集ではない。神学的思考を聖書に向けるということは、聖書のうちに表現された文面に、奴隷的に拘束されるということとまったく別である」という点を踏まえ、父・子・聖霊なる三位一体の神を証言していると思われるプルーフ・テキストを単に収集するにとどまらず、その背後にある信仰や思想の内容に迫りたいと思う。

もちろん、教理としての三位一体論は紀元二世紀に論じ始められたもので、聖書には「三位一体」という言葉も、その明確な概念規定も見いだせないが、聖書の証言する神は必然的に、三位一体論的に受け止められ、理解されざるを得ないリアリティをもっているのである。それ故に、以下においてその現実を捕らえてみたい。

一 聖書における神の現実

モーセ⁽⁴⁾やイザヤ⁽⁵⁾がその召命に際して、聖なる神のみ前で自分の罪や汚れに恐れおののいたように、あるいはまた、ペトロがガリラヤ湖上の小舟のなかでイエスに出会ったとき、彼も自分の罪を告白しながらイエスに対して「主よ、わたしから離れて下さい。わたしは罪深い者なのです。」と叫んだのは、イエスのなかに「聖なる神」の姿を見たからであろう（ルカによる福音書 五・八）。このときイエスはペトロに「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」（五・一〇）といわれた。モーセやイザヤを民の指導者や預言者として任命した神と同じ神が、イエスにおいてここに立っておられたといつてよい。

このように、ペトロはイエスと出会って、自分と自分の使命を発見し、イエスの弟子となったのであるが、同時にイエスが人間でありつつ人間を越えた神であるという、イエスの真の姿をも発見したのである。誰でもイエスと出会った者は、新しい自分に気付くと同時に、イエスとイエスの現わす神に気付かされる。

トマスは、イエスが復活して弟子たちの前に現われた時、どういふわけかその場に居合わせなかった。イエスの復活を伝える仲間の弟子たちの話を聞いても、トマスは復活を疑っていた。しかし、その一週間後に、イエスは弟子たちと共にいるトマスと直接出会われたことよって、トマスはイエスの復活を信じるに至った。そのとき彼はイエスに対して「わたしの主、わたしの神よ」と呼びかけた(ヨハネによる福音書 二〇・二八)。ここでもイエスは、トマスを真の信仰者とすると共に、ご自分が主であり、神であることを明らかにされたのである。

ところで、このようにイエスはご自分の神性を明らかにされる一方、「主」であり「神」と呼ばれるイエスが、弟子たちに対して「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。……聖霊を受けなさい」(ヨハネ 二〇・二一―二二)と言われたことに注意したい。神と呼ばれるイエスが、「父」と呼び、また「聖霊」と呼ぶ方が、イエスとは別に存在することになる。

特にこの箇所だけでなく、聖書全体にわたって、神が父と呼ばれるほかに、子と呼ばれ、聖霊と呼ばれている。まるで神が三人おられるかのようである。しかし聖書の神は、ただ一人しかおられないことも明白である。この一人の神の三つのあり方(Seinsweise)とでも言い表わさざるを得ない神の現実が存在する。この点を、さらに聖書に即して見てみよう。

(一) 唯一の神

イエスと律法学者の間答に、「私たちの神である主は、唯一の主である」、「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です」(マルコ 一二・二九、三二)というのがある。ここ

では、ユダヤ教的な伝統に立つ律法学者と、主イエスとが、「神は唯一である」と言う信仰において一致していることが分かる。

使徒パウロもその手紙の中で、「世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、私たちは知っています。現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものも、私たちににとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、私たちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在しているのです」(コリントの信徒への第一の手紙 八・四―六)と書いている。

このような、新約聖書における唯一神への信仰の背後には、その最初からただ一人の神を信じてきたイスラエル民族の宗教と歴史があるわけで、いま、旧約聖書から、二、三箇所を引用してみよう。

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」(申命記 六・四)。

「あなたは、主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った。」(申命記 四・三五)。

「わたしは主、あなたの神、……あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」(出エジプト記 二〇・二―三)。これは有名な『十戒』の冒頭の言葉である。多くの異教の神々に取り囲まれて生活するイスラエルの民に向かって、預言者たちも繰り返しの言葉を語らなければならなかった。

神は唯一であり、私たちがただ一人の神を信じるということは、この世界と歴史を、一人の神とのかかわりで、一元的に捕えることを意味している。表面的・現象的には、光と闇、善と悪、愛と罪の対立のように見えても、本質的には光・善・愛である唯一の神が、この世界を支配しておられるのである。

わたしとのかかわりで言えば、このわたしは唯一の神と人格的に出会うことにより、一人のかけがえのない存在とされ、そして一人の神だけがこのわたしと真実なかかわりを持ち、愛をもってわたしを導いて下さるので、わたしは

もはや、いろいろな迷信にとらわれたり、占いや人々の根拠のない言い伝えなどのもつ、さまざま不気味なたりや不安や恐れからも解放されるのである。

世界の中の対人関係においても、人間ひとりひとりを唯一の神と対応する、唯一の、かけがえのない人格的な存在として認識することにより、相手を道具化・手段化することのない、一対一の人間らしいかわり、誠実な愛と信頼の関係が可能となる。

一人の神を信じるということは、一人の人間、一つの民族や国家、一つの主義や制度、一つの信念や思想などを絶対化しないということ、つまり、人間と人間の生み出したものを、人間以上のものとは考えず、神のようにみなしたり祭り上げたりしない、という意味である。⁽⁷⁾ また、ただ一人の神を信じるとき、この神の前では、全ての人は人間として平等であり、人を外見や能力や社会的な地位・立場、知名度などで評価せず、どんな人とも誠実に、人格的に関わる事ができる道が開かれる。

さらに、たとえわたしが、自分自身とこの世に対してどんなに絶望したとしても、わたしを最後まで愛して下さい。ただ一人の神が存在するという事は、わたしの生きる希望の根拠である。

(二) 父なる神⁽⁸⁾

旧約聖書の時代には、神はイスラエル民族の父(イザヤ 六三・一六)、また、王の父(詩 二・七)と呼ばれ、父は権威と慈愛をもつ支配者、保護者を意味した。

イエスは神を「わたしの父」といわれ(マタイ 七・二一、ヨハネ 六・三二)、親しく「アッバ、父よ」と呼びかけ、主なる神への親近感・信頼感を表現された(マルコ 一四・三六)。

また、イエスはしばしば、弟子たちや群衆にむかって、神を「あなたがたの父」(マタイ 五・一六、四五、四八、六・一など)と言われた。そして、彼らが祈るときには、「天におられるわたしたちの父よ」(マタイ 六・九)と

呼びかけるよう教えられた。

パウロは、私たちが生まれたままの自然の状態で、神を父と呼べるのではなく、イエス・キリストの救いによって私たちが神の子とされるとき、はじめて、神を「父」と呼ぶことが許されると説き（ローマ 八・一五、ガラテヤ 四・五―六）、わざわざ「私たちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父……」（コリントの信徒への第二の手紙 一・三）と、「イエス・キリストの父」を強調することもあった。

イエス・キリストによって、一民族の父であった神が、全人類の父となられたと行ってよい。

私たちにとって神が「父」であるということは、神が宇宙の法則や精神的な原理や、世界の第一原因（アリストテレス）などという冷たい抽象的な概念や力ではなく、生きた、愛に満ちた、権威ある人格的な実在であり、私たちの人生の最終的な責任をとって下さるお方（詩編二三編など）であることを意味している。それは、イエスが「父」という言葉で、天地を創造し、支配し、イスラエル民族と世界の歴史とを慈愛深く導かれる、全知・全能の主なる神を表わされ、この父なる神への信頼と服従を教えられたからである。

イエス・キリストを通して神を父と呼ぶ者同士は、世界中どこに住んでいてもお互いに兄弟・姉妹であることを喜びをもって認め合い、世界の平和のために祈る者とされる。

また、神の父性は、人間の父の姿から連想するものではなく、父なる神の姿から、人間の父性に意味と尊厳とが与えられるのであるとK・バルトは言っているが、意味深い言葉である。⁽⁹⁾

なお、普通「神」というときには、「父なる神」を指していることが多いということも記憶しておきたい。「父」は「父・子・聖霊」の代表格だからである。

(三) 子なる神イエス・キリスト

イエス・キリストの人格とその働きについては別に取り扱わねばならず、小論の範囲を超えるので、ここでは、イ

エス・キリストが「まことの神」であるという信仰を示す聖書の証言をいくつか検討するにとどめたい。

弟子たちとの最後の晩餐のあとで、イエスはこう祈られた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現わすようになるために、子に栄光を与えてください。あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです」と（ヨハネ一七・一―二）。イエスは人間として、ユダヤ人としてこの世に生れ、三三年の生涯を全うされたが、ときにご自分を父なる神の「子」と言われた。「子」とは「神の子」であり、父と同じ神性をもつ神という意味であり、小さい、幼い、位格が低い、などという意味はない。「子」と言う言葉で、人間と世界の救いのために、人間の姿になられた「救い主」と呼ばれる神を指している。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現われであって、万物をご自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました」（ヘブライ人への手紙 一・一―三）。ここで「御子」とはイエス・キリストのことであり、「神の本質の完全な現われ」であり、神そのものであるとされている。

そのほか、フィリピの信徒への手紙 二・六の「キリストは、神の身分でありながら」や、コロサイの信徒への手紙 一・一五の「御子は、見えない神の姿であり」なども、イエス・キリストの神性をのべており、ヨハネの第一の手紙の「このかたは真実な神」（五・二〇）や、テトスへの手紙の「祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、私たちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現われ」（二・一三）なども、「イエス・キリストは神である」と明瞭に表現している。

また、マルコ福音書は、「神の子イエス・キリストの福音の初め。」と言う書き出しで始まり、ナザレ人イエスが神の子であることを証言してやまないが、例えば、イエスが中風の人をいやす奇跡物語において、イエスが神と同じ「罪を赦す権威」を持っておられ、したがって神であることを主張している。ただ、イエスが中風の人をいやすために「あなたの罪は赦される」(マルコ 二・五)と言われたとき、これを聞いた律法学者たちが「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神お一人のほかにも、いったい誰が、罪を赦すことができるだろうか。」(マルコ 二・七)とイエスの言葉を批判したことを記し、イエスの在世中にイエスが神であることは認められ難かったことを示している。イエスの神性はイエスの復活後の教会の信仰告白において成立する。

(四) 聖霊なる神

聖霊は文字通り霊的存在であり、神であるとされる。私たちの五感では捕えることのできない方であり、科学的にその存在を証明することは不可能である。知性的にも情緒的にも、私たちの理解をはるかに越えた「超越的」な存在である。しかし、聖霊はただ不可解な、不気味な、捕えどころのない存在ではなく、聖書を通し、祈りを通して、過去のイエス・キリストを現在化させ、私たちと言葉による交わりを可能にする「人格的」な実在である。

「一同は聖霊に満たされ」(使徒言行録 二・四)、「イエスは……約束された聖霊を……注いで下さいました」(使徒言行録 二・三三)、「賜物として聖霊を受けます」(使徒言行録 二・三八)などの表現は、聖霊が何か目に見える実体としての「あるもの」のように聞こえるが、そうではない。これらは、聖霊のリアリティを表わす言葉といつてよい。

聖霊は、父なる神と、子なる神から私たちのところへ送り出され、⁽¹⁰⁾ 私たち人間に対してダイナミックに働き、父なる神・子なる神と私たちとの深い結びつきを生み出し、その人格的な愛と信頼の関係を成り立たせる神である。要するに、私たちをイエス・キリストと出会わせ、イエス・キリストを通して私たちに父なる神への信仰を与え、救いを

もたらし、その信仰と救いを完成にまで導いて下さる神のことを「聖霊なる神」と呼ぶのである。

旧約聖書では、「聖霊」は例えば、次のように表わされている。

「主は言われる。……働け、わたしはお前たちと共にいると万軍の主は言われる。ここに……わたしがお前たちと結んだ契約がある。わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない」(ハガイ書 二・四―五)。

「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。御前からわたしを退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください」(詩編 五一・一二―一三)。「わたしの霊」、「あなたの聖なる霊」は「聖霊」を指し、超越的な神でありつつ、信仰者の生活のただ中にはいつて来られる方(内在の神)であることを示している。

新約聖書では、人間として地上の生涯をたどったイエス・キリストの上に、聖霊が働いていたことを、ルカによる福音書は特によく伝えている。(一・三五、三・二二―二三、四・一、一四、一〇・二二、など)。これはイエス・キリストが神の性質と力とをもってこの世界に到来し、救いの働きを遂行されたということの意味する。

さらに、イエスは十字架の死を前にして、聖霊について、弟子たちに次のように言われた。

「わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネによる福音書 一四・二五―二六)。

「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしていた弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである」(ヨハネ 一五・二六)。

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである」(ヨハネ 一六・一二―一三)。

ここでの「弁護者」「真理の霊」は聖霊であり、聖霊がイエス・キリストの言葉と行為の意味を弟子たちに明らかにされたように、今日の私たちにも明らかにして下さり、時間・空間の隔たりを越えて、イエス・キリストを私たちに、今、ここで出会わせて下さるといふのである。

このように、イエス・キリストを私たちと結びつける聖霊を、使徒パウロはもっとはっきりと直接的に「イエス・キリストの霊」(フィリピの信徒への手紙 一・一九)、あるいは「キリストの霊」(ローマの信徒への手紙 八・九—一一)、「主の霊」(コリントの信徒への第二の手紙 三・一七)、「御子の霊」(ガラテヤの信徒への手紙 四・六)などということがある。

また、ヨハネの第一の手紙の、「神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えて下さいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります」(四・一三)において、「御自分の霊」は「聖霊」であるから、「聖霊」が私たちに分け与えられることは、「神」が私たちのうちにとどまってお下さることであり、「聖霊」は、とりもなおさず「神」とみなされていることが分かる。

「イエスが神の子であることを公に言い表わす人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります」(四・一五)は、パウロの、「聖霊によらなければ、誰も『イエスは主である』とは言えないのです」(コリントの信徒への第一の手紙 一二・三)と結び付いて、聖霊の働きと共に、聖霊の神性をも告白しているといつてよい。

聖霊において私たちは、イエスを主と告白し、また、神との内的なかかわりを与えられる。ここで、信仰者と神との深い人格関係を、聖霊との人格関係といふことができる。聖霊は神性をもつ存在であると理解することができる。なお、聖霊が、信じる者に「霊の賜物」を下さる場合、「霊」は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです」(コリントの信徒への第一の手紙 一二・一一)といわれるが、この『望むままに』(kathos bouletai

カソース・ブウレタイ)は、聖霊の明確な意思決定をあらわす言葉であり、⁽¹¹⁾従って、聖霊が人格的な存在であることをよくあらわしている。聖霊をただ、神の力、神の働きとして理解するのみでは不十分なことがここからもよく分かる。

二 「三位一体の神」の現実

(一) 三位一体の神の表現

このように聖書には、父なる神、子なる神イエス・キリスト、聖霊なる神がおられること、しかも神は全能の主なる神ただ一人であることが描かれているが、一人の神の三つの姿についての説明や、一と三の整合性について特に論じられているわけではない。

しかしながら、マタイによる福音書二八章一九節には、イエスのお言葉として「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」とある。「父と子と聖霊の名」の「名」(ονομα オノマ)は、三位格の名でありながら単数であることに注意したい。紀元八〇年代の教会では、すでに、父・子・聖霊の神が一人の神であると信じられ、その名(単数)において洗礼がおこなわれていたことをうかがわせる。また、これより二〇年も早くパウロは、コリントの教会への手紙の末尾で、父と子と聖霊の神による祝福の祈りを送っている。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」(コリントの信徒への第二の手紙 一三・二三)と。

なお、ヨハネによる福音書一四―一七章にも、父と子と聖霊の深いかかわりが述べられていたことは、すでに見たとおりである。

このように、一世紀後半に成立した新約文書には、やがて二世紀の教会が「三位一体の神」と言い表わす信仰と真理の現実があらわれていると見てよい。

〔註〕

- (1) H・G・ペールマン『現代教義学総説』 一三五ページ
- (2) 同上 一三六ページ
- (3) ウイルヘルム・ニーゼル『カルヴァンの神学』（渡辺信夫訳） 六九ページ
- (4) ホレブの山で、燃える柴の中からお呼びになる聖なる神の前に、履物を脱いで裸足で立ったモーセは、イスラエルの民をエジプトから脱出させる指導者になるよう導かれる。（出エジプト記 三・一一―一二）
- (5) 神殿で聖なる神と出会う経験をするイザヤは、罪に汚れた者が神を仰ぎ見たのだから、自分は滅んでしまうというが、神はイザヤの罪をきよめ、彼を預言者とする。（イザヤ 六・一一―五）
- (6) ロバートソンとプラマーによると、「万物はこの主によって存在し」の「よって」は、イエス・キリストの「創造」の働きを意味し、「私たちもこの主によって存在している」の「よって」は、イエス・キリストの人類再創造（救済）の働き（コリント第一 五・一七）を指しているとする。
 (Robertson, A. & Plummer A.; A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St. Paul to the Corinthians, ICC, Edinburgh,)
- (7) 天皇の即位の式に続く大嘗祭は、天皇の神格化の儀式であり、象徴天皇制を規定している現行憲法に違反すると指摘する学者や宗教関係者も多い。日本国民の統合の象徴であるなら、それは無宗教的でなければならぬからである。憲法違反ばかりではなく、神は唯一であると告白するキリスト教信仰の立場からも、天皇の神格化は容認できない。第二次大戦下、唯一神を告白するキリスト教徒に対して、天皇を現人神とする日本政府や官憲の弾圧ぶりは、歴史に生々しい爪跡を残している。
- (8) 最近アメリカでは、女性解放運動や「女性の神学」の立場から、「父なる神」という表現は、古代からの家父長的な概念としての「父」をイメージすることになるので賛成できないという動きがある。同時に、神を三人称単数男性の代名詞「彼」(He)で表現することにも反対の意見があり、論議を呼びながらも、「彼」を用いない方向での努力がなされている。
- (9) 「先ず神だけが唯一の、本来の、真の父である。人間の父はこの創造者でも主でも、罪からの解放者でもない。だが神は主イエス・キリストの父として憐れみの父である。そして、人間にもまたこの父性を与えたのは、この父なる神の恵みに

- 他ならない。人間的・被造物的形態において神の父性が説明されることを許されるということは、人間の父性に意味と尊厳とを与え、尊敬へと召すものなのである。」バルト・教会教義学・解説シリーズ Ⅲ・4 「キリスト教倫理 Ⅱ 交わりにおける自由」鈴木正久編・新教出版社 一二七ページ
- (10) ヨハネ一五・二六(「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしていた弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来る時……」)によれば、聖霊は父より送られる(發出する)と言うことができる。ところが、同じヨハネ一六・一四(「その方(真理の霊＝聖霊)はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである」)によれば、聖霊は御子イエスからも送られるように読める。いわゆる「フィリオケ Hiloque (「また子からも」)論争」の争点である。

(11) “poulomai”, to will, wish, desire, purpose, be minded, implying more strongly than “thelo”, the deliberate exercise of volition.

Abbott-Smith, G., A Manual Greek Lexicon of the New Testament, T. & T. Clark, Edinburgh

(12) Muller, Richard A., Dictionary of Latin and Greek Theological Terms, Drawn Principally from Protestant Scholastic Theology, “persona” p. 223

(13) アタナシオス信条三一―二八項参照。例えば「3 公同の信仰とはこれである。我らが一つなる神を三位において、三位を一体において、礼拝することである。4 しかも、位格を混同することなく、本質を分離することなく。」(信条集 前編 八ページ)

参考文献

Abbott-Smith, G., A Manual Greek Lexicon of the New Testament, T. & T. Clark, Edinburgh, 1937³
 Muller, Richard A., Dictionary of Latin and Greek Theological Terms, Drawn Principally from Protestant Scholastic Theology, Baker Book House, Grand Rapids, Michigan, 1986
 Robertson, A. & Plummer A.; A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St. Paul to the Corinthians, ICC, T. & T. Clark, Edinburgh, 1914²
 鈴木正久編『バルト・教会教義学・解説シリーズ Ⅲ・4 「キリスト教倫理 Ⅱ 交わりにおける自由」』新教出版社 1955

三位一体論の予備的考察

ウイルヘルム・ニーゼル 『カルヴァンの神学』（渡辺信夫訳）新教出版社、1960
日本基督教協議会文書事業部キリスト教古典叢書刊行委員会 『信条集 前編』新教出版社、1972
ペールマン・H・G 『現代教義学総説』（蓮見和男訳）新教出版社、1982